

終助詞（文末詞）の認知的負荷

西 川 寛 之

キーワード：終助詞，文末詞，文構成要素，文法性判断，負荷

0. 文構成要素としてみる文末詞

「文末詞」とは、形態素の連続を発話単位の「文」としてまとめ上げる機能語である。「文末詞」としての終助詞の具体例として終助詞「よ」が、文の命題情報を発話者が所有していることを表し、終助詞「ね」が、文の命題情報を発話者と聞き手が所有することを表す。このように、「文末詞」が文の命題情報を持つ者の人称と深く関わるという考えのもと、「文末詞」が文という単位認定の必要不可欠な単位であるという仮定の下、言語活動において人間が「文の認定」を行う際に「文末詞」としての終助詞がどのように機能しているかを考察する。

仮定する文構造は、下の図のような構造で、文により伝達される「伝達情報」を情報の所有者と「文末詞」とで挟み込み、上下関係では、この情報の所有者と「文末詞」が「伝達情報」を統率する形の構造である。

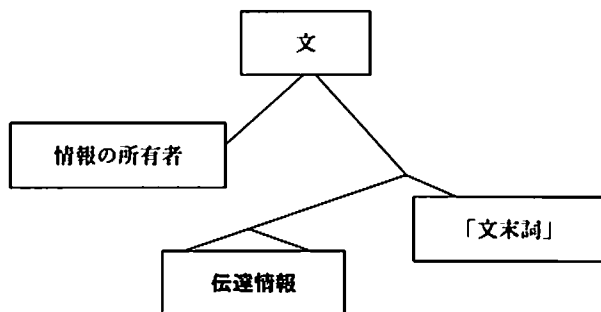


図1

これは、形態素の連続体がどこまでも連続するのではなく、その連続する形態素が「文」というまとまりを形成するために、「文末詞」が「文」の「開始」と「終結」を表す機能語として働いていることを図示したものである。

生物学で用いられる用語に、「テロメア」というものがある。テロメアは、細胞の分裂において大きくは二つの役割を持っている。1つ目の役割は、分裂する過程で起こる染色体の複製の際に、

《情報の所有者》(情報・形態素の連続体)《文末詞》

図2

線状である染色体の両端を決定する役割である。2つ目の役割は、このテロメア自身が分裂するごとに短くなり、細胞の複製(分裂)回数の上限を決定する。何らかの問題でテロメアがうまく機能せず、染色体が末端を欠いた状態になると染色体同士の末端が融合を起こすなどの問題が起きることが観察され、テロメアは「染色体の末端を保護する染色体の要素」という定義もなされている。

「文末詞」は、文という単位において、このテロメアの役割を果たすと考える。特に本論文で指摘するのはテロメアの役割として、上記「1つ目の役割」としてあげたものと、「文」に対する「文末詞」の役割を重ね合わせられるものとして提案する。線状であることに着目してこの構造を欠くとなると次のようになる。

テロメアが持つ末端を特定する機能を持つ「文末詞」は、形態素として音形化されたものである必要はなく、イントネーションやポーズによりその存在が認知されれば充分であるが、形態素として音形化されない場合も、図1や図2のように、文の両端の要素(「情報の所有者」と「文末詞」)を表す。

ただし、このような両端が存在することが発話の前提となっており、書き言葉など、発話者が持つ情報を発信しているのが明らかな場合には、句点(「。」)などで「文」の終わりが示されるだけで充分である。これは、書き手が情報の所有者であることが明確だからである。一方、会話など、相互交渉(インタラクション)のある場面での発話では、この「情報の所有者」が誰であるのかは一定でない。話し手だけが「情報の所有者」になり得るのではなく、聞き手と話し手の両方が情報の所有者であることもある。例えば、会話の中で

(1) 面白くない。

という発言があった場合に、「面白くない」という自分の考えを情報化した音声によって、その情報を相手に伝える場合は、この「情報の所有者」は、話し手ということになる。しかし、文末に上昇イントネーションが与えられた場合などは、否定辞の意味が打ち消され、「面白い」という形態素の連続体によって示される情報の所有者として、話し手と聞き手の二者として表示されることもある。同意を求める表現などがこれに当たる。終助詞「ね」などが用いられた場合も同様に、「文末詞」によって「情報の所有者」として聞き手も含んだものとなるため、終助詞がつかない「文」と比べると、その「文」の意味を解釈する上で、「情報の所有者」を捉え直す為の認知的な負担がかかる。

この、認知的な負担がかかる構造を、ここでは「複雑な構造」と呼び、考察を進める。「文」の構造は、本論文で取り扱う終助詞の有無によって変わるわけではなく、すべて図1と図2で示したように、染色体におけるテロメアのごとく、「情報の所有者」と「文末詞」とが、形態素の連続体

の始点と終点を示すと考える。ただし、「文末詞」の種類によっては「情報の所有者」が「話し手」だけでない「文」を構成するため、「情報の所有者」を捉えなおすという過程が含まれる。これを、1つ過程が増えるということから「複雑」という表現を用いる。

この「複雑さ」の検証に用いる実験は、提示された文の文法性判断にかかる反応時間を計測し、提示される文のタイプごとに反応時間に差が生じるかどうかを検証するものである。

1. 「文末詞」

「文末詞」は終助詞を持たない文にも存在する。本論文では「文末詞」の存在が認められれば一語文も1つの文として成立するという立場をとる。発話は話し手が「文」を作り出し、音（または文字など）を用いて外（聞き手）に発信するものである。そして、その「文」が表す情報自体は、通常は話し手が持つ情報である。終助詞の類は、「文」が表す情報を持つ者、つまり「情報の所有者」を「話し手」に限定したり、「話し手以外」にしたりする機能を持つ。この1つが先に見た終助詞の類である。

文末詞を具体的に表すとすれば、次のような文では最後にある「た」がその文末詞の機能を表す。

(2) 雨が降ってきたた。

(3) 学校へ行った。

実際の発話では、この「た」のイントネーションやポーズなどによって、書き言葉では句点などによって、文末詞として聞き手（読み手）に解釈される。この際、この「た」は、通常、人称に関して特別な制限を持たない⁽¹⁾。発話者が特定できる際には、その発話者自身（話し手）が、これらの文が表す情報を所有しているという前提で聞き手は理解する。これは言語構造上の問題ではなく、運用上の場面や文脈による言語の省力化であろう。

(4) 雨が降ってきたよ。

(5) 学校へ行ったね。

このように、人称を限定する終助詞が文末詞として働くと、(2)や(3)では運用上の前提として解釈される「情報の所有者」が誰であるか問う情報を文構造に組み入れて解釈する必要が生じる。

本論文で行う実験では、「文末詞」が終助詞「よ」や終助詞「ね」のように主語を限定する語句によって、聞き手が文を理解するためのプロセスが複雑になることを検証する。

終助詞の類のように主語を限定する「文末詞」が本当に文全体の主語の限定に関わる力を持つとすれば、「主語を限定する文末詞（終助詞「よ」「ね」など）」を持つ文は、これを持たない文に比べて、聞き手の脳の中で文を理解するための過程に負担をかけると推測される。なぜなら、機能語の「文末詞」が示す人称と、その文が持つ主部の人称が一致するか否かを判断し、文構造を捉える必要があるからである。その結果、人称の素性を確認するために、聞き手が文構造を捉える際の認知的な負担が大きくなるという予測のもとに検証する。

2. 文構造の複雑さと実験方法

2.1 実験方法

実験は、坂本勉他（2003）において用いられたソフト LinguaLab を使用した。反応時間を正確に記録するため、コンピュータを用いる。図3のように、一度、文の途中まで表示し、その上で文末部分が提示される。

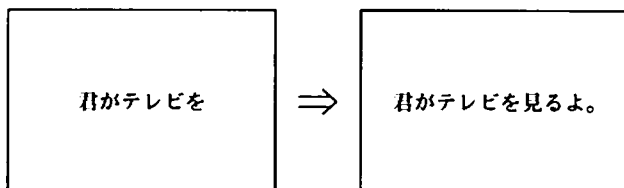


図 3

実験では、この図3の左のように、コンピュータ画面に表示され、次に右のように文全体が表示される。右の全文が表示された時点で、被験者が文法性判断をし、その判断に応じたボタンを押す。実験データは図3の右の図が表示された時点からボタンを押すまでの時間である。

この実験を行う前提として、文末詞が文構造に関与するという仮説を立てた。この構造について次で述べる。

2.2 文構造の複雑さ

ここで言う文構造の複雑さとは、先に述べたように、「文」を理解するために確認する過程が増えることを指す。意味内容を確認する必要がある文の階層の数が増すごとに文の複雑さが増すという考え方である。「文の階層」というのは、時枝の「入れ子型構造」、また Chomsky（1995）など、Minimalist Program の考え方を援用したものである。聞き手にとって、文という単位は「文末詞」の存在により形成され、かつ「文末詞」の存在を認知することによって、人間は音または語の並びを文として意味を解釈すると考える。その際、「文末詞」は階層の最も上部を形成し、文構造を形成すると考える。その際、前章で見たように、「話し手」の属性や文の主体などの情報を含んだ構造を持つ。ここでは「話し手」の属性や文の主体などを「情報の所有者」と称し、構造上に組み込んで表示する。

この図4は、文の構成が「伝達情報」と、それを階層の上から支配する（以降、「統率する」）「文」の2つの階層を示したものである。階層が複雑になるというのは、「伝達情報」が複数の階層を持つ場合が考えられる。また、「文末詞」として終助詞「よ」や終助詞「ね」が用いられる場合には、終助詞「よ」や終助詞「ね」によって「情報の所有者」に関する情報が明示的に示される。「聞き手」は文構造として、文中に現われた語の素性を頼りに、この「情報の所有者」と文の構造を解釈する。

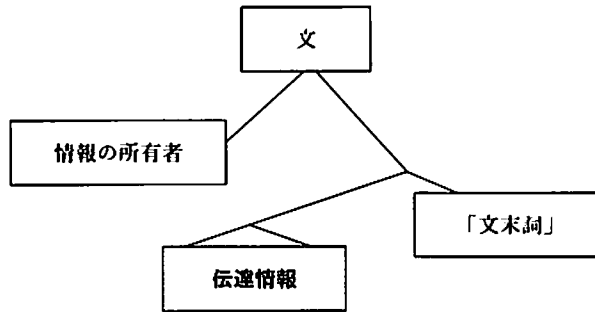


図4（図1再掲）

(6) 雨が降ってきたよ。

(7) 学校へ行ったね。

このような場合、(6)は、終助詞「よ」によって、「情報の所有者」が話し手であることが示される。(7)は、終助詞「ね」によって、「情報の所有者」が「話し手と聞き手」という複数であることが示される。「聞き手」は、文の解釈に際し、この終助詞類が指す意味情報を文構造に組み込んで解釈する必要がある。一方、終助詞のように「情報の所有者」を制限する文末詞がない場合には、「情報の所有者」が文中では非明示的な表示になるため、「聞き手」は、言語運用上の場面や文脈などから、文構造に依存することなく「情報の所有者」を「話し手」として解釈することができる。つまり、文の構造を解釈するプロセスを省くことができるのである。文の構造を解釈する上で、人称の制限をする終助詞の有無が、文構造の階層の数に大きく関わると考えられる。そして、その結果として、文末詞が人称の制限をするか否かが、「聞き手」が文を認知する過程にかかる負荷を決定する要因になると考える。

上記の「伝達情報」が複数の階層を持つという例として、「犬を飼う」に対して「君が犬を飼う」という文を例に考える。

(8) 犬を飼う。

(9) 君が犬を飼う。

(8)を図4の「伝達情報」の部分だけ切り出した形で提示すると図5のようになる。

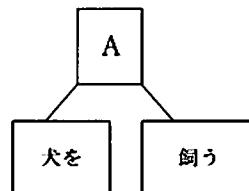


図5 (8) 犬を飼う

これに対し、(9)は1つ階層が増え、図6のようになる。

この違いが階層の違いで、Aが1つ目の階層でBはAを統率し、より複雑な構造となっているという考えをもとにして考察を行う。文構造の解釈によっては、本論文ではAやBの内部をさら

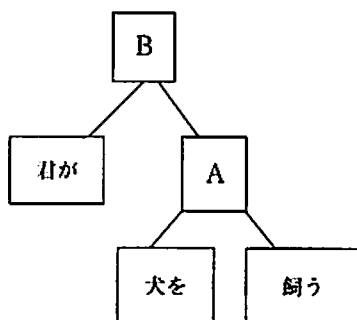


図6 (9) 君が犬を飼う

に詳細に記述することも可能であるが、文末詞に関わる部分だけに限定し、一部⁽²⁾ 簡略化した表記を行う。また、ここでの目的が、「話し手」が文を生成する手順を問うているのではなく、「聞き手」がどのように文という単位を聞き取っているかを中心にした考察であるということを確認しておきたい。話し手側からの視点で文を考えれば、先の例文の「飼う」という述語が目的語を必要とするなど、文中に要求される項の数が決まっているということが出来る。また、A という構造が単独で現れる文についても、前提として、B もしくはそれ以上の階層が想定されるという考え方になる可能性もあるが、現れた音や語の並びを理解するプロセスに目を向けて実験を行う。このプロセスは、数学などで用いられる括弧の表記で表すことも可能である。大括弧、中括弧、小括弧、それぞれで囲まれたものは、その並びよりも、それを囲む括弧によって計算のプロセスが示される。「君が犬を飼うよ」という文は、先に示した樹形図を用いると図7 のようになる。

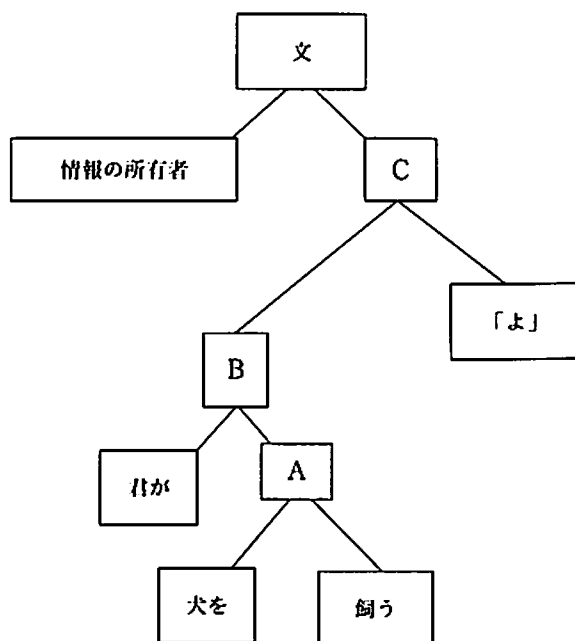


図7 君が犬を飼うよ

そして、これを算用の括弧で示すと

(10) 文=[{B(A)}よ]

となる。これは、まず A という単位を見つけ、その中で意味関係を理解し、その上の構造として B を理解した後に B と A との関係の解釈を行い、その後、中括弧で囲まれた B を統率する大括弧の理解へという順で理解が進むことを表す。先の図でより下方のもの、括弧では、より小さな括弧の中から順に文解釈の計算が行われ、より大きな括弧へと文解釈の計算が進み、文全体の意味の理解が進むと考える。このように考えると、(10)で B を形成する要素がない場合にはそれだけ理解のプロセスが短くなり、文全体を知覚するための認知活動の負荷が軽くなることが予測される。この仮説が正しければ、「犬を飼う」に対して「君が犬を飼うよ」は認知負荷が高いものとなる。

実際の発話、特に話し言葉では文末詞に関して具体的な文字表記による形を持たない「ポーズ」「イントネーション」などが働くこと、および書き言葉では話し言葉で「ポーズ」「イントネーション」が表す情報を、句点や読点の類によって補い、文末詞の存在を「聞き手」（読み手）が知覚していると考えて実験を進める。

仮説

実験の結果として、先に示した複雑さによる反応時間の差が生じると考える。複雑さの要因として、第一に文末詞が持つ機能、「情報の所有者」を明示する機能を取り上げる。

(11) 「聞き手」は、文末詞が「情報の所有者」に制限を加える場合、「伝達情報」内の主部と「情報の所有者」が一致するか否か判定するプロセスが必要になる。

(12) 「聞き手」は、文末詞が「情報の所有者」に複数の可能性を与える場合、「伝達情報」内部の情報から⁽¹⁾ 限定しようとするプロセスが必要になる。

(13) 「聞き手」は、文末詞が明示的に「情報の所有者」を限定しない場合、「情報の所有者」を認定するプロセスを必要としない。

(11)は、終助詞「よ」を持つ文などである。終助詞「よ」は、通常、情報の所有者として一人称（話し手）を示す。よって「君が犬を飼うよ」のような文では、「情報の所有者」は一人称で、(10)で示す B が持つ主語「君が」とは別のものであるという理解が必要になる。しかし、「僕が犬を飼うよ」という文であれば、終助詞「よ」が示す「情報の所有者」は B の「僕」と同じ一人称であり、「聞き手」が階層を増やすプロセスを省略することで、認知的な負担の軽減を図ると推測する。つまり、「情報の所有者」とその内側にある主語の持つ人称の素性が一致しない場合には、それぞれの一致しない人称の素性を解釈する必要性が生じる。これによって、1つ上の階層を想定し解釈のプロセスに認知的負担をかける。一方、人称が一致した場合はそれ以上階層を増やすことなく、人称のチェックというプロセス以上の負荷がかからないと考える。

(12)は、終助詞「ね」を持つ文の場合である。終助詞「ね」は一人称複数の場合と、相手に問いかける場合など二人称の可能性もある。この場合は、(11)で想定するプロセスを省略することが出来ない。文末詞である終助詞「ね」の解釈をするため、終助詞「ね」が持つ人称の素性を確定する手続

きとして、1つ内側の主語の持つ素性との一致を確認するプロセスが必要となる。また、終助詞「ね」の場合は内側がA、図7の「犬を飼う」だけで主語の情報を持つBの階層を持たない場合、終助詞「ね」が示す「情報の所有者」の素性に2つの可能性が考えられる。2つの可能性が生じた結果、その文中でいずれの素性を持つかが決定できない。このような場合は、文に示されている情報で不足するものを「聞き手」が何らかの形で補うという負担が生じることが考えられる。これも、認知負担の一因となることが予想される。

⑬は具体的な文として図7に用いた例を挙げるとAの「犬を飼う」、Bの「君が犬を飼う」というものである。これは、「情報の所有者」を特定する要素が現れていないため、「聞き手」は先に見たような素性をチェックする必要を持たない。これは、統語的な問題だけでなく、語用論的な制約などで補われる。明示する必要のない情報は音声的に省かれたものとして認知されるため、素性の一致を求める階層を作るプロセスが省略出来るのである。その結果、認知負担が軽減されると考える。Bの階層を持つ場合、終助詞が示す素性が必要とする「情報の所有者」との一致は不要である。ただし、BとAとの関係をチェックするためにA「犬を飼う」と比較すると、認知負担は大きくなると予想される。また、⑪で想定したプロセスの中で、Bの構造を作る要素（「僕が」など）がない場合、「情報の所有者」を1つに限定する文末詞が示すものがBの要素と一致すると解釈され、文の複雑さとした階層の数から考えると、認知負担の大きさはほぼ同じ程度になると考えられる。認知負担を大きくする「複雑さの度合い」については、次のようにまとめることが出来る。

⑭ 「聞き手」が解釈のプロセスで構築する構造の数が複雑の度合いを決める。

「聞き手」が構築する階層については、次のような規則が導かれる。

⑮ 「情報の所有者」と「内容情報」の主語が一致する場合、階層が省略される。

これらを検証するため、母語話者の文法性判断にかかる反応時間の増減を見る実験を行う。

3. 実 験

階層上の構造が、文を知覚し理解するプロセスによるものなら、階層の違いが、文を受容し理解するまでの時間に差をもたらすと考える。その実証のために実験を行った。

先に示した図1のAで示した構造のみの文であれば文を理解するための負担は少なく、構造が増すごとに負担が大きくなっていくと考える。具体的には、話者の属性を表すものとして一人称主語、二人称主語を捉え、終助詞が文の主語と関係を持つことについて実験で検証したい。主語および終助詞の条件の異なる文に対して、その文が適格な文か否かを判定する実験を考える。

実験は、無主語文「テレビを見る」、「音楽を聴く」、「犬を飼う」の三つを基本とし、終助詞のない状態の文、終助詞「よ」がある文、終助詞「ね」がある文を実験に用いる。また、主語との関係を見るため、上記の基本とした文に「僕が」「君が」、および「僕は」「君は」を持つ文を対象とした。

実験は、コンピュータを用い、日本語として適切な文か否かを判定するという実験を行い、画面

に文が表示されてから判定を下し、判定に従ったボタンを押すまでの反応時間を測定した。

実験では無主語無終助詞の文、「テレビを見る」、「音楽を聴く」、「犬を飼う」に対する反応時間と他の文（主語の有無、格助詞「が」と係助詞「は」、一人称と二人称、終助詞の有無、終助詞「よ」と終助詞「ね」を組み合わせたもの）との反応時間を観察する。これらの組み合わせの結果、実験に用いた文のタイプは、1. 主語ナシ終助詞ナシ、2. 主語ナシ終助詞「よ」、3. 無主語終助詞「ね」、4. 一人称主語助詞「が」終助詞ナシ、5. 一人称主語助詞「が」終助詞「よ」、6. 一人称主語助詞「が」終助詞「ね」、7. 一人称主語助詞「は」終助詞ナシ、8. 一人称主語助詞「は」終助詞「よ」、9. 一人称主語助詞「は」終助詞「ね」、10. 二人称主語助詞「が」終助詞ナシ、11. 二人称主語助詞「が」終助詞「よ」、12. 二人称主語助詞「が」終助詞「ね」、13. 二人称主語助詞「は」終助詞ナシ、14. 二人称主語助詞「は」終助詞「よ」、15. 二人称主語助詞「は」終助詞「ね」、の計 15 タイプで、これらを用いて実験を行った。データ数は合計 90 件、内母語話者各文 48 件、および非母語話者 42 件である。このうち本論文では母語話者のデータを考察対象として分析を進めた。実験の結果として記録された反応時間を、それぞれの文のタイプごとにひとつの群とし、各群の間に時間の差を調べた。比較の際には t 検定を行い、片側の P 値から、各文に対する反応時間に有意差があるかどうかを観察した。

実験に用いたデータの文のタイプと実験で用いられた文の例は以下の表 1 のようになる。

無主語終助詞ナシは「聞き手」にとってもっとも単純な構造を持つため、反応時間が最も早いことが予期される。この文と他のそれぞれの文との反応時間を比較した結果は表 2 のとおりである。

全 14 文で反応時間に増加が見られた。この実験結果は、文を理解するにあたり、正しい文であ

表 1

	文のタイプ	使用文例
1	主語ナシ終助詞ナシ	テレビを見る。
2	主語ナシ終助詞「よ」	テレビを見るよ。
3	無主語終助詞「ね」	テレビを見るね。
4	一人称主語助詞「が」終助詞ナシ	僕がテレビを見る。
5	一人称主語助詞「が」終助詞「よ」	僕がテレビを見るよ。
6	一人称主語助詞「が」終助詞「ね」	僕がテレビを見るね。
7	一人称主語助詞「は」終助詞ナシ	僕はテレビを見る。
8	一人称主語助詞「は」終助詞「よ」	僕はテレビを見るよ。
9	一人称主語助詞「は」終助詞「ね」	僕はテレビを見るね。
10	二人称主語助詞「が」終助詞ナシ	君がテレビを見る。
11	二人称主語助詞「が」終助詞「よ」	君がテレビを見るよ。
12	二人称主語助詞「が」終助詞「ね」	君がテレビを見るね。
13	二人称主語助詞「は」終助詞ナシ	君はテレビを見る。
14	二人称主語助詞「は」終助詞「よ」	君はテレビを見るよ。
15	二人称主語助詞「は」終助詞「ね」	君はテレビを見るね。

表 2

主語ナシ終助詞ナシとの比較対象	$P(T \leq t)$ 片側	検定からの結果
主語ナシ終助詞「よ」	P 値=0.022<0.05	増加が認められる
主語ナシ終助詞「ね」	P 値=0.020<0.05	増加が認められる
一人称助詞「が」終助詞ナシ	P 値=0.0008<0.05	増加が認められる
一人称助詞「が」終助詞「よ」	P 値=0.0006<0.05	増加が認められる
一人称助詞「が」終助詞「ね」	P 値=0.00001<0.05	増加が認められる
二人称助詞「が」終助詞ナシ	P 値=0.0003<0.05	増加が認められる
二人称助詞「が」終助詞「よ」	P 値=0.00007<0.05	増加が認められる
二人称助詞「が」終助詞「ね」	P 値=0.0000007<0.05	増加が認められる
一人称助詞「は」終助詞ナシ	P 値=0.025<0.05	増加が認められる
一人称助詞「は」終助詞「よ」	P 値=0.028<0.05	増加が認められる
一人称助詞「は」終助詞「ね」	P 値=0.0022<0.05	増加が認められる
二人称助詞「は」終助詞ナシ	P 値=0.0018<0.05	増加が認められる
二人称助詞「は」終助詞「よ」	P 値=0.00004<0.05	増加が認められる
二人称助詞「は」終助詞「ね」	P 値=0.000003<0.05	増加が認められる

るか否かを判定する過程で、基本とした文よりも他の文のほうが認知的負荷が高いことを示していることが考えられる。

終助詞の付加が、主語のある文と同様に反応時間を遅らせることから、終助詞が単に文末に付加するのではなく、文全体を従える構造を持つことが立証される結果となった。

この実験で見た反応時間順で文のタイプをまとめると表3のようになる。反応に時間がかかったものから順に示す。

この結果から、「情報の所有者」を限定する文末詞が現れると反応時間が遅くなることが判る。また、Bの構造が同じもので比べると、終助詞「よ」よりも終助詞「ね」のほうが反応時間が遅い。このことと、Bの構造が二人称主語を持つものが一人称主語のものより時間がかかることを考え合わせると、仮説の⑨で挙げたように、認知負担が軽いということがいえる。人称の素性をチェックするプロセスで、人称が一致する「一人称+終助詞「よ」」の場合には、二人称主語の場合と比較して認知負担が軽いということが考えられる。

これを文末のタイプごとに並べると表4、5、6のようになる。

さらに詳細に、各データ間の有意差を t 検定によって調査した結果について考察を進める。

表4で見た順番も、 t 検定から有意差を5%水準で求めると、有意差が出るのは、(一人称助詞「は」終助詞ナシ)と、それより時間のかかった3つ(一人称助詞「が」終助詞ナシ、二人称助詞「が」終助詞ナシ、二人称助詞「は」終助詞ナシ)だけであった。一人称助詞「が」終助詞ナシ、二人称助詞「が」終助詞ナシ、二人称助詞「は」終助詞ナシの間では有意差は見られなかった。

(一人称助詞「が」終助詞ナシ)と(二人称助詞「が」終助詞ナシ)の P 値は $0.1250 > 0.05$ 、(二

表 3

Bの主語の人称	Bの主語を示す助詞	文末詞としての終助詞
二人称	助詞「が」	終助詞「ね」
二人称	助詞「が」	終助詞「よ」
二人称	助詞「は」	終助詞「よ」
一人称	助詞「が」	終助詞「ね」
二人称	助詞「は」	終助詞「ね」
二人称	助詞「は」	終助詞なし
一人称	助詞「は」	終助詞「ね」
二人称	助詞「が」	終助詞なし
一人称	助詞「が」	終助詞「よ」
一人称	助詞「が」	終助詞なし
なし	なし	終助詞「ね」
一人称	助詞「は」	終助詞「よ」
なし	なし	終助詞「よ」
一人称	助詞「は」	終助詞なし
なし	なし	なし

表 4 終助詞ナシ

表 3 の順位	Bの主語の人称	Bの主語を示す助詞	文末詞としての終助詞
6	二人称	助詞「は」	終助詞ナシ
8	二人称	助詞「が」	終助詞ナシ
10	一人称	助詞「が」	終助詞ナシ
14	一人称	助詞「は」	終助詞ナシ
15	ナシ	ナシ	終助詞ナシ

表 5 終助詞「よ」

表 3 の順位	Bの主語の人称	Bの主語を示す助詞	文末詞としての終助詞
2	二人称	助詞「が」	終助詞「よ」
3	二人称	助詞「は」	終助詞「よ」
9	一人称	助詞「が」	終助詞「よ」
12	一人称	助詞「は」	終助詞「よ」
13	なし	なし	終助詞「よ」

表 6 終助詞「ね」

表 3 の順位	Bの主語の人称	Bの主語を示す助詞	文末詞としての終助詞
1	二人称	助詞「が」	終助詞「ね」
4	一人称	助詞「が」	終助詞「ね」
5	二人称	助詞「は」	終助詞「ね」
7	一人称	助詞「は」	終助詞「ね」
11	なし	なし	終助詞「ね」

人称助詞「が」終助詞ナシ)と(二人称助詞「は」終助詞ナシ)の P 値は $0.2866 > 0.05$, (一人称助詞「ガ」終助詞ナシ)と(二人称助詞「は」終助詞ナシ)の P 値は、 $0.0505 > 0.05$ であった。 P 値 $=0.0505$ というのは5%の検定で有意差の扱いには注意が必要だが、大きく、一人称と二人称の間で違いがあることがわかる。また、主語がないタイプの文は負担が軽いことがわかる。このことから主語の人称が文を認知するための時間に影響を与えることが考えられる。

4. 結 果

実験結果は、仮説を支持するものであった。特に、終助詞「よ」の文は主語の人称による違いが際立つ結果となっている。

表5のそれぞれの間の有意差を観察した結果、二人称の文の間で有意差は見られなかった。主語に続く助詞が「が」の群と「は」の群に関する t 検定の結果、 P 値は $0.114 > 0.05$ であったのに対し、一人称と二人称との間では大きな差が見られた。(二人称助詞「は」終助詞「よ」)と(一人称助詞「ガ」終助詞「よ」)との t 検定結果、 P 値は $0.0051 < 0.05$, (一人称助詞「は」終助詞「よ」)では、 P 値は、 $0.0004 < 0.05$ であった。

このことから、終助詞「よ」を持つ文は、文の主語の人称に大きく左右されるということが言える。主語に続く助詞の種類よりも、主語の人称の影響が大きい。先に想定した文構造の省略が行われない二人称主語の文が、構造の省略可能な一人称の主語の文よりも反応に時間を要したことは、予測と一致する結果である。

表6から、終助詞「ね」の文の結果を、有意差に注目し考察する。終助詞「ね」の文に関しては、終助詞「よ」の文と異なる傾向が見られる。人称による傾向として、一人称より二人称のほうが反応時間が必要であるという傾向は見られるが、主語に続く助詞が「が」であるものは反応時間がかかることが指摘できる。 t 検定の結果をもとに有意差の有無から見ると、(一人称助詞「は」終助詞「ね」)が最も反応時間が短いということがいえるが、主語の人称だけが異なる(二人称助詞「は」終助詞「ね」)との間は P 値 $=0.09 > 0.05$ で有意差は見られない。同じ人称同士で比較すると、二人称の場合、(二人称助詞「が」終助詞「ね」)と(二人称助詞「は」終助詞「ね」)との間での P 値は、 $0.0019 < 0.05$ で有意差が認められることから、(助詞「が」)の方が負荷が大きいと考えることができる。一人称の場合、(一人称助詞「が」終助詞「ね」)と(一人称助詞「は」終助詞「ね」)との間は P 値 $=0.033 < 0.05$ で、こちらも(助詞「が」)の方が時間がかかることが指摘できる。

以上の結果から、予見した人称のチェックのための負荷が、終助詞を持たない文と終助詞「よ」を持つ文では反応時間の差に影響していることが指摘できる。また、終助詞「ね」の場合は、文末詞が「情報の所有者」の人称に複数の可能性を持つことが要因となって、主語の人称による反応時間の増減がないという予測とも一致する結果となった。

5. 今後の展望

明示的な文末詞として取り上げた終助詞が、文の主語と強い関係を持つことがこの実験結果からわかる。反応時間の差の要因となるのが、文構造であり、主語との関係から文末詞とその内側の文との間に構造上の違いがあるということが、本論が検証を試みた文末詞の働きである。

文末詞によって文構造が変わり、文を捉えるための認知負担の大きさに影響を与えるほど文末詞の役割は大きいものである。

今後、この「文末詞」という文構成要素が日本語以外の言語にも存在するのかどうかを考えながら、日本語を外国語として学習する者の習得順序の関係について、考察を進め、「日本語教育」の現場に還元できる研究へとつなげて行きたい。

〈注〉

- (1) 上昇イントネーションなどで、疑問の意味が付加されると、「話し手」が情報の所有者でないことが示される。
- (2) Chomsky (1995)などで、時制を表す TP、人称一致と屈折に関わる IP などの記述が考えられるが、簡略化して記述する。
- (3) 通常の会話では前後、場面等の情報に支えられる可能性もある。

参考文献

- Chomsky, N. (1995) The Minimalist Program Cambridge, Mass.: The MIT Press. (外池滋生・大石正幸 監訳 (1998)『ミニマリスト・プログラム』翔泳社)
- 片桐恭弘 (1997)「終助詞とイントネーション」『文法と音声』くろしお出版
- 坂本勉・玉岡賀津雄・松本充石共著 (2003)「空主語文の処理における終助詞「よ・ね」の機能に関して」日本言語学会 第127回大会予講集
- 杉藤美代子 (2004)「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」『文法と音声IV』くろしお出版
- 杉藤美代子 (1992)「イントネーションの記号論」文化言語学編集委員会『文化言語学 その提言と建設』三省堂
- 時枝誠記 (1978)『日本文法 口語篇』岩波書店
- 西川寛之 (2003)「「展叙」と「統叙」と「陳述」とミニマリスト・アプローチの機能範疇との比較」『応用言語学研究：明海大学大学院応用言語学研究科紀要』No. 5
- 橋本進吉 (1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 藤原与一 (1990)『文末詞の言語学』三弥井書店
- 藤原与一 (1998)「日本語と文末詞」佐々木峻・藤原与一編『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
- 藤原与一 (2004)『日本語における文末詞の存立』三弥井書店
- 渡辺 実 (1971)『国語構文論』塙書房
- 渡辺 実 (1996)『日本語概説』岩波書店